

会 議 要 録

会議の名称	令和2年度酒田市文化芸術推進審議会(第1回)
開催日時	令和2年7月18日(土) 午後3時～午後5時
場 所	酒田市民会館「希望ホール」小ホール
出席者	<p>○出席委員</p> <p>中川 幾郎 委員、熊倉 純子 委員(リモート参加)、工藤 幸治 委員、 上松 由美子 委員、田中 章夫 委員、阿部 直善 委員、加藤 聡 委員、 加藤 真知子 委員、白旗 定幸 委員</p> <p>○欠席委員</p> <p>市原 多朗 委員</p> <p>○事務局</p> <p>村上教育長、本間教育次長 (社会教育文化課)</p> <p>阿部課長、村井課長補佐、小松課長補佐、池田主査兼係長、佐々木主査、菊池主事、 齊藤主事、佐藤推進員</p>
<p>1. 開会(事務局)</p> <p>2. 委嘱状交付</p> <p>3. 教育長あいさつ</p> <p>教育長:皆さんこんにちは。このコロナ禍の中で様々なものがリモートミーティングになっており、意思を通じ合わせることに工夫を凝らしているところである。委員の皆様には引き続き2年間、お引き受けいただいたことに心から感謝を申し上げます。振り返ってみると2年前、酒田市の文化芸術というのをどうすればいいのか、今まで根本的に考えてきたのかということまで立ち返り、どうしたらいいかと考えたときに、委員の皆さま方の考え方から勉強して、ようやく少しずつ形になってきたと思っている。文化芸術は建物を建てるように工期があるわけではないことをつくづく感じた2年間でもあった。私たちが目指している姿は、結局は酒田市民一人一人がどのように文化芸術を受け止めて、あるいは自分の必須のものとして暮らすことができるようになったか、それにかかっていると改めて思った。社会包摂と育成という方針を掲げて今までやってきたが、どこまでできたのか、これからどういう風に歩めばいいのかということはこの審議会ですっかり意見を出し、歩みを確かめながら進んでいきたいと考えている。そういう意味で、委嘱状をお渡ししたときに改めて2年という節目ということで新しいステージに入っていくと思っているところだった。もう一つ話題になっているのが、土門拳記念館と酒田市美術館の財団統合で、どのようにしていったらいいのかということは今考えている最中である。これまで2つの館はそれぞれの運営方針の特色を出しながらやってきたわけだが、統合という形で新たな魅力を創出できるかどうかということが肝になっていると思う。当然ながらそれぞれの強みを生かしてこれまで通りの運営をより一層続けるという方向もあるが、せっかく統合するのであれば、私は社会包摂と育成という基本方針は酒田の文化芸術のあらゆる所に当てはめてもいい考え方だと思っている。私は積極的に、スクールプログラムという授業として成り立つプログラムを美術館あるいは土門拳記念館で作れないかと、知恵を集めようとしている。美術の先生やこれまで酒田市の文化芸術に係ってきた方々から様々なアイデアをいただいて、もしできれば来年度から、スクールプログラムのための展</p>	

示内容を初めから企画する段階までいけたら幸せだなと夢を持っているところである。本日は皆様方からは、酒田の財産、資源である美術館や土門拳記念館をどうすればいいのかということについて忌憚のない、あるいは楽しいアイデアを積極的に私共に教えていただけたらありがたいと思う。

4. 委員の紹介(事務局)

5. 会長及び副会長の選出(事務局)

事務局:酒田市文化芸術基本条例第20条第5項の規定において、会長、副会長は委員の互選によりこれを定めとなっている。立候補、あるいは推薦はあるか。

委員:事務局の推薦をいただきたい。

事務局:会長を中川幾郎委員、副会長を工藤幸治委員にお願いしたいがいかがか。

委員一同:異議なし。

6. 会長及び副会長あいさつ

会長:初心に戻って進行役を務めさせていただく。長々挨拶をする時間はもったいないので、議論する時間に割きたいと思う。皆様方にご協力をお願い申し上げて、挨拶とさせていただきます。

副会長:80歳になったら全ての公職をやめようと思っていたが、色々事情があり頑張っていこうと気を取り直した。よろしく願います。

7. 協議

会長:これより第1回酒田市文化芸術推進審議会を開催する。協議に入る前に、本日の出席を確認したい。本日欠席は市原多朗委員である。熊倉委員はリモート参加である。文化芸術推進審議会規則第3条第2項の規定により会議が有効である事を報告申し上げる。それでは答申に対する酒田市の対応について事務局から説明をお願いしたい。

事務局:答申に対する酒田市の対応について説明する。令和元年12月27日付で二つ答申をいただいている。まず一つ目、「市は、市民及び市各部署との連携強化に努めること」とある。それについて、令和元年度は文化芸術推進計画の基本的施策6の市民との協働共創による事業展開に基づき、酒田市文化芸術推進プロジェクト会議の企画運営部会、作業部会、文化芸術推進サポーター、市民ワークショップの開催、協働パートナーとの協働により多様な事業を実施した。しかしながら参画の仕方や協働の在り方については課題を残す結果となっている。このことから令和2年度については次の通り市民との連携を強化に努めていきたいと考えている。酒田市の文化芸術推進プロジェクト会議の企画運営部会においては、今年度から文化芸術全般を推進する組織として位置付け、委員を増やして組織体制の強化を図っている。社会包摂と育成の方針に基づいた丁寧な事業の実施を目指すために、障がい者福祉団体からも参加いただいた。また、多様な文化芸術による施策の展開、新しい可能性を創出するため、東北芸術工科大学の常任理事、山形交響楽団の専務理事、青年会議所の理事長、会社経営者、まちづくりに携わる若い実業家の方々からも参加いただいた。企画運営部会のメンバーを増やすことで文化芸術に関心のある世代だけではなく、まちづくりの視点からも文化芸術事業への関心を高め SNS 等を活用した PR が期待できると考えている。それから同じく酒田市文化芸術推進プロジェクト会議の作業部会においても、文化財に精通した学芸員、食文化の専門家、シンガーソングライター、東北公益文科大学の学生といった幅広い市民に加わっていただき専門性の高い情報とノウハウを生かした事業展開を目指していきたいと考えて

いる。事業に応じて協働パートナーをお願いしている訳だが、障がい者等の事業所をはじめ関係団体との連携をさらに強化して事業の充実を図っていきたく思っている。障がい者アート展で協働パートナーとして連携した福祉事業所から、木工製品の売り上げを伸ばすためにデザインをどうしたらいいかという相談があり、広がりが少しずつ見えてきている。

二つ目、「専門性を有する専門の人材の確保及び職員の資質能力の向上を図ること」とあるが、これについては新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から今年度計画していた事業の実施が困難になったため、文化行政に関すること、広報に関すること、マネジメントに関すること、接遇に関する事など研修の充実を図り、職員の資質向上に努めていきたいと考えている。今年度は基本的施策9にある、専門性の高い文化の仕掛け人の配置に基づき、特に広報を専門とするクリエイティブディレクターより協力をいただきながら職員の資質向上を図っていく予定である。

会 長:今の説明に対して皆様の意見を伺いたい。

委 員:説明があった通り、作業部会、企画運営部会、そこに専門性のある方々を増やしたということは大変すばらしい。従来は少ない人数でやっていて無理があるのではないかと思っていた。前回企画運営部会に参加させていただいたが活発で内容も充実した会議だった。ただしその会議でも発言が出たが、ある程度時間も経過しているが社会包摂と育成についてまだまだ市民に浸透していない。時間をかけて繰り返し説明いただきたい。コロナ禍の中で思い通りに事業ができないが、逆に期間があるということで、職員の資質を高めることに費やしているということだが、市民と職員の連携は事業の成功には欠かせない事。コロナ禍で市民の中に入って行って協働で仕事をするのが困難な一面もあるが、外に出ていく機会を多くし市民と触れる機会を増やしていただきたい。

委 員:今話を聞いて、色々な立場の方とつながろうとしていることをとてもうれしく思う。様々な業種や年齢層の人に入ってもらうことによって新しいものが生まれてくるのではないか。なかなか足が向かなかったり、行く機会がなかったり、興味が広がらないのはどうしてなのかということにも耳を傾ける機会が必要だと思う。

委 員:冒頭に事務局から説明があったが、全くその通りだと思う。何とんでも令和元年度組織がしっかりしてきた。作業部会を数回、企画運営部会を数回。行政のトップの教育長がしっかり反省してまとめて頑張るぞという意気込みが偉いと思った。人材の確保及び能力の向上については、自分の考えを持ち芸術活動することは職員としてとても大変だと思う。数年で仕事の内容が変わる中で、この課題は非常に大きい。しっかり個人個人が勉強しなければ積み重ねにはならない。適材適所になるような人選が必要なのではないかと思う。全戸配布の酒田市文化芸術推進事業のパンフレットはとてもいい評価をいただいている事だと思う。リーダーシップとフレンドシップ、それからフォロワーシップ、このフォロワーシップの精神が酒田市民には欠けているのではないか。決まったということに対して協力していく「優しさ」が酒田市民には必要、そこが私たちの課題かと思う。

委 員:この難しい状況下で色々進めているということとても心強く思っている。最大の課題だった専門人材の配置について、どのような方なのかを教えて欲しい。

事務局:長野県上田市にあるサントミュージアムで職員として勤務していた方で、今年3月に退職し、フリーランスのクリエイティブディレクターとして活動されている。酒田市は広報の部分が非常に弱いと感じていたので今回はその部分でお手伝いいただく考えである。

委 員:東北芸術工科大学の先生、公益大学の先生や学生、青年会議所の理事長を入れたり、若い方を参加させていくことはとても良い事だと思う。審議会とプロジェクト会議や実施部隊との垣根を取り払っていくことが必要だと思う。具体的には、実施部隊がプロジェクト会議に参加し、オブザーバーとして議論を聞いて

て、何を目的としているのかを相互に理解し実施する。審議会においても同じことが言えて、プロジェクト会議のメンバーが会議の場に参加すれば、審議内容を理解すると思う。どうしても個別の会議の議論は目先の議論になりがち傾向があるため、俯瞰した議論をするには、垣根を取り払えば、それぞれの組織が何を求め何を目的としているか相互理解でき、実施するプロジェクトも一体となった理解のもとに遂行されることが期待できる。連携強化とは言葉としては簡単な意味だが、実際、連携強化をどう図っていくのかが問題である。メンバーだけがいても連携強化は進展しないので工夫が必要である。若い人が参加するということは非常に良いことなので各々の組織体の垣根を取り払い、相互に参加可能でオープンな会議を進めていければ連携強化が図れるのではないかと思う。

委員：私も委員の意見に賛成である。加えて、「市各部署との連携強化」とあるが、せっかく各課でいろんな情報をもっているのだから、そうしたところの連携を深めていったらもっと広がりや深まりが出てくると思う。ひょっとしたらまちづくりなどにもつながっていくのではないかと。多様な連携とあるが、それを具現化するの結構大変だと思う。市役所内部の持っている力を思いっきり利用し合い情報を出し合いながらやってくれば良いと思った。2は、前回アートディレクターが来てくれたことに自分はすごく期待し、何かが変わる！！と思ったが一年くらいで辞められたと聞いて驚いた。いくら専門的な人材を確保しても、その人をどう活かしてどう繋げてどう力を発揮してもらおうかということがとても大事なことで。これから専門人材を入れるにあたってこちら側の配慮が必要ではないかと思う。

委員：もう7人目くらいの発言になるので、大体同じような意見をもってこの場に臨んでいる。多様な人材を投入することや、酒田市最大の組織である酒田市役所が、縦割りを乗り越えて文化芸術のことができたなら市民にはすごくインパクトのある事だが、そういうことは正直あまり感じない。市長部局をいかに我々の力で動かしていくのかということについては大変重要重大な問題だと思う。それから、現状、芸術家の皆様がコロナの影響によりボロボロの状態である。地域の芸術家を助けてあげなければいつも思っている。日本全体の芸術家の方を何かするのはなかなか難しいが、地域でそれを生業にしている人がいれば、その方たちを我々が支えてあげることができないかというのが正直な気持ちだ。本当にボロボロで、生活ができていない人がたくさんいると思う。これはしっかり認識するべきだ。

委員：専門性も高めながら体制強化を図って、しかもその中にまちづくりの視点も取り入れるということで、市の方向性は間違っていない。障がい者団体や作業所などの製品のことでつながりも芽生えてきている、それは社会包摂と育成部分にも当てはまってきていると思う。各委員の方がおっしゃっているように試行錯誤しながら進んでいこうと思うが、粘り強く取り組んでいってほしいと思う。それから委員からもあったが、市内部の連携があまりできていなかった。まだまだここが弱い部分だと思う。昨年若竹ミュージカルがあったがぜひその経験を活かしていってほしい。できれば今の事務局の説明を文書にして欲しい。

会長：プロジェクト会議のメンバーと、この審議会のメンバーが切断されているのは困るので、何らかのコミュニケーション回路を確保するべきではないのかと委員のご指摘があった。これに対してコメントをいただきたい。

事務局：非常に大事なご指摘だと思う。そこはきちんとした仕組みができるように考えたい。工藤副会長には作業部会に参加していただいている。

会長：現実に推進してくれている市民組織とこちらと交流する場合、こちらが出かけていく方法もあるし年に一回くらい合同会議を開くのもいいと思う。現場からの意見も聞いて市が持っている条例や基本方針、基本計画がいかに向こうからみたら遠いものに見えるか。それから、向こうからこちらの方に2、3人来てもらおう方法もあるかもしれない。しかしそんなに構えないで、年に一回くらいはフランクに語る交流会議をしてもいいかもしれない。そういうことを考えていただけたら嬉しい。

次の議題に移るが、一つは社会包摂と育成というのは非常に重要な基本的な方針であり姿勢である。異を唱える委員は一人もいなかった。むしろもっともって認識を深めてほしい、粘り強くしっかり進めてほしいという意見かと思う。それから専門人材の育成や確保という点では後ほど議論しなければいけないが、一般事務職の人事異動ルールと専門性の確保はどのようにして乗り越えるか。研修である程度一般職の方も基礎的に身につけるといことと、人事異動があるたびに新人は必ず受けるというルールが必要かもしれない。人事異動の対象にならないような専門職人材の配置を行政内部でする必要があるのかどうか。これ以上学芸員や司書を抱え込めないという自治体もあると思う。それに対しての代案として財団を統合して運用してはどうかという議論があるわけだが、これは後の議題にかかることである。行政内各部署との連携強化だが、行政内部に文化芸術がどのように届いているのだらうと思う。それから芸術家が非常に苦境に立たされており、このコロナの時代において自治体の文化行政、文化施策がいかにあるべきか、供給側である文化芸術家に対するどのような支援がありうるのか、需要者側である市民層はどういう実情で何が困っているのか、どういう歪みが生じてくるのか、ということの議論を後ほどしなければいけないと思っている。それではコロナ禍における事業の方向性の説明に移る。

事務局：資料1～3をご覧ください。時間の関係があるので詳しい説明は割愛させていただく。今年度はコロナ感染拡大の観点から当初予定していた事業の多くが中止となっている。市としては、特効薬ができるまでは無理に事業を実施することはできないと考えている。今年度は、障がい者アート作品、酒田市出身の画家佐藤真生先生の作品、公募のアマビエ作品を一つの企画展としてキュレーションし、酒田市美術館に展示を行う他、山形交響楽団の演奏や東北芸術工科大学准教授の松村泰三先生によるワークショップなど、規模を縮小しアートマルシェとして実施する予定である。その他コロナ禍ゆえに酒田に特化し、酒田の魅力発見事業として酒田市の文化施設や人物等、酒田の宝に着目した事業の実施を考えている。こちらは現在文化芸術推進プロジェクト会議作業部会の皆様と一緒に検討している。またこのような状況下でも文化芸術に触れることができるように、リモート配信できるシステム構築についても検討中である。コロナ感染拡大に伴い事業ができない状態が続く中で酒田市の政策の中でどんな事業や支援をしていけばよいかということについてご意見をいただきたい。

委員：現状から大規模な事業は行えないことは理解している。今説明があった通り、地元を見つめ直す機会にすることは賛成である。その一環として、委員の発言にあったように、地元の芸術家の活動に我々が注目し、発表の場を提供するようなことがあっても良いと思う。特に地方都市の課題として、若い世代が進学、就職の為に地元から離れると、その後戻れない現実がある。人としての成長の時期に、地元の歴史や文化・芸術に触れ、活動している人々を知ることは地元への誇りや愛着を醸成させ、地元と共に生きようとする人材を育てる機会になるのではないかと。地元で活動している人々の協力を得て、地元でできること、地元でしかできないことなどを検討していただきたいと思う。

委員：楽しみにしていたものができなくなるということで、お互いにいろんなところで気持ちが萎えているところがあったと思う。今話があったように、できることを活かしてやるというところをぜひ工夫していきたい。先ほど規模の縮小という話もあったが、やり方を工夫することで人数の制限や日にち・地域を移動したり、場所を固定しないであちこち動いたり、いろいろなやり方をすることでたくさんの人に見たり聞いたり触れたりする機会が生まれるのではないかと。企画する方は大変なこともあると思うが、ある意味新しいものを一緒に楽しんでやるという気持ちでできたらうれしい。

委員：市民芸術祭としては中止だが、やれそうなものがあれば個々で工夫してやっていく。いずれにしてもコロナとの関わりでやれるかやれないか、10月・11月になればやれるのではないかと期待感も実際市民は持っている。昨年度プロジェクト会議の組織ができてから私はとても忙しくなった。創意工夫するため

に、市民が喜んでくれる事業を考え計画するのに、今まで何年間も会長をやってきたが社会教育文化課の方々とかんなにたくさん話し合うことはなかった。先ほど事務局も触れたが、やりたいというパッションをもって若い人たちが出すアイデアというのはすごいと思う。

委員：資料を拝見したが、中止が非常に多くて残念な状況だと思う。せっかく専門の方が広報に力を入れていくと説明があったが、事業自体が中止であれば広報することもない。しかしどういう風にして続けていけるのか、ということに知恵を絞らなければいけないので、ぜひそちらの方にご尽力いただくのが良いと思う。大きく SAKATA アートプロジェクトと銘打っているが、中身を拝見するといわゆる従来の文化事業のように見えなくもないので、こうしたことが何に繋がっていきそうなのか、まだまだデザインされていないという気がする。あまり密ではなく暮らせる街のはずなので、発想を転換してみんなで一か所に集まって何かをするというのではなく、小さく集まれる場所をたくさん展開していくとか、ホールにとってはつらい時代ではあるが、そうしたことを考えて特に地元のアーティストの方々と小さく何ができるのかということをもう少し考えていかないと何も先に進まない気がする。こういう時だからこそ冒頭で教育長がおっしゃったような、学校との連携やそうしたことのコンテンツの開発などにもう少し力を入れてもいいと思う。

委員：SAKATA アートプロジェクトのペーパーを見ると、中止の案内で真っ赤になっている。私が気になったのは黄色の部分。これに専門家に入っていて実施するとき、例えば今までの楽器クリニックではなくて違う形で展開していき、いろんな専門家にも意見を聞いてやれることをもっとフェーズを変えて、みんなの知恵を借りてやっていくという方法もあるのではないかと。とにかくこの黄色の部分の事業をもう少し煮詰め注力していくのも一つの手だと思う。委員がおっしゃった、スクールプログラムを考えてこれをやったらどうなのかというような課題設定をして、その黄色の部分のことをやってみるというのも一つかと思う。楽器クリニックも街中でやってもいいのではないかと、いろんなアイデアをプロジェクト会議の中でもんでいって、ちょっと違う形の事業にしていくのもありだと思う。

委員：私の知り合いから「楽しみにしていた希望ホールの行事も市民芸術祭も、全部なくなって心が干からびる。」という電話がきた。CD で音楽を聞くことはいくらでもできるが、やはり生のものが聞きたいんだと言われた。生きていく上で文化芸術はとても大事なものだと言われた。できるかわからないが、以前行っていた街かどコンサートのような感じで、地元の芸術家に活躍してもらって小規模の集まりを開催していてもいいのかなと思う。ピアノでも吹奏楽でもいいだろうし、そういう場を作って、近場の人が聞きに行けばわざわざ遠くから出かけてこなくてもあちこちで場所を設けてやって、人と人を繋いでいく。そういうことを細々とやっていてもいいのではと思う。芸術家も毎日練習しているが発表する場がないことが苦しい。そんな感じで繋いでいって、また情勢が変わったらアートマルシェにも皆で出てもらえば、またそこで人と人が繋がっていくのではないかと考えている。

委員：全世界共通で同じ悩みを共有しているので、酒田でも同じように何か考えられることがあるのではないかと。少なくとも日本だけではなく、文化芸術を心の糧にしている世界の皆さんが悩んでいるので、何かいい手はないかと思う。最近いつも気にしているのは、特に高校三年生についてである。私の後輩の酒田東高校の吹奏楽部は二転三転して、来週 24 日に3曲だけのコンサートを親と OB のために開催する予定。自分がその身に置かれたらどうしていただろう。もう一度高校三年生をやらせてあげたいと本当に思う。40 年も前に卒業しているが、こんなことってあっていいのかと思う。

委員：福祉の仕事をしていて、地域福祉とは人と人の心理的・物理的距離を縮めようとしているわけだが、今全く相反する動きがある。文化芸術も同じ境遇だとつくづく思っている。その中で先ほど、教育長がスクールプログラムの話をされ、また委員からもいろんな芸術家が自分たちの現場も含めてとても困っているという話があったが、我々の経験からすると、今社会福祉法人が地域で公益的な活動をしなさいと、各

法人に対して自分たちの得意な技は何かということと、地域の要望を結びつける仕事を今やっている。それを私なりに発想すれば、スクールプログラムや地域で芸術をやっている人の出番づくりという点で、そういうことをメニュー化していくことと、それを必要としている人を小規模多売的に結びつけていくという作業がもしかしたら社会教育文化課として、あるいはプロジェクト会議としてできるのではと思う。事業が中止になった分の経費が当然あるわけだが、コロナ対策に全部持っていかれないように、逆に教育委員会の方から先手を打つということも必要だと思う。

会長:非常にシリアスな現状である。ただ静観視する自治体が大半かと思う。そこで少しでも足を踏み出すと「そんな事業やってくれたから感染したじゃないか」とか「感染源を提供したのではないか」というバッシングに合うかもしれないというリスクを考えると、行政側としては何もしない方がいいという考えになってしまう。それを乗り越えていくには知恵がいると思う。大きく分けて供給者側の危機と需要者側の危機両方あると思う。都道府県とか大きな団体は供給者側の危機に対して早急に手を打つ責任があると思うが、市長として基礎的自治体としてやるべきことは何なのかと考えると、一番は需要者側の危機に手を打つべきではないか。こんな時代になればなるほど弱い者にしわ寄せがくると私は思う。まずは障がい者、その次に乳幼児、小中学校の子供たち、高校生、こういう順番ではないだろうか。もちろん外国人も。そういう社会的に弱い立場の社会包摂と教育という基本姿勢をもっと完結すべき。むしろこういう時期だからこそ一線を守り抜くという姿勢を鮮明に出していると思う。委員が言ったように、社会福祉団体としての地域との連携を手がかりにして、どのようなアウトリーチ事業が望ましいのか、各施設に派遣でリスクの低いアートとは何なのかをよく研究してプログラミングすることを考えてもいいのではないかな。希望ホールの事業の中止になった分の予算を転用すればいけるはずだし、そういうところをもっと考えていいと思う。音楽や演劇、美術ばかりではなくて能、狂言、演劇、というものをもっと考えてもいいと思う。場合によっては俳句、短歌の習い事を学校に持っていくというののもあっていいと思う。私は三重県の伊賀市の文化審議会の会長をやっており、このまちは芭蕉の俳聖殿がある事で有名である。芭蕉の言葉に「三才のわらわにも、俳諧をものすべし」という言葉が残っているが、つまり芭蕉は3つの子に俳句をさせなさいと言った。そういうことも一つの教訓だと思うので、音楽や美術ばかり習っていてもだめ。文学ももう一回着目してもらいたい。文学では非常にコロナの感染リスクは低いと思う。先ほど教育長から希望ホールや美術館側が学校教育プログラムに準拠することができるような訪問学習のプログラミングをしてほしいという話があったが、今度は学校や障がい者の施設に出張したらアイデアをもう少し実現できないかと思う。私は大阪府堺市の文化審議会会長もしているが、堺市ではコロナをきっかけとして市内在住のアーティストを発掘、動員して学校に派遣するという取り組みを今年一斉に始めた。これも一つのヒントとして申し上げたいが、子どもたちの健診会場に絵本を持ち込んだブックスタート事業に倣って、アートスタート事業を本格的にやったらどうかと思う。一番パンチ力があるのは音楽だが、音楽を始めるにはまだリスクが高いと思われる都市は美術から始めるという方法もあると思う。そのあたりを事業化するチャンスに入ったと考えてもいいのではないかな。先ほどの酒田東高校の演奏の話もご父兄の方々に披露するということが、これを広く一般市民にまで話が広げられたらいいと思う。吹奏楽は医学的に言うとすごく唾が飛ばらしいが、これに対しても何か方法があると思う。

続いて、新財団が目指す方向性についての報告を事務局からお願いしたい。

事務局:新財団が設立に至った経緯について報告する。土門拳記念館は市の定例監査で監査委員から財団の経営について数回にわたり所管課として考えることを講ずべきという指摘を受けてきた経緯がある。また平成28年には企画展示の充実を目指すため基本財産1億円から2,400万円程の取り崩しを行った。ただ効果は一時的なものにとどまっているという評価である。美術館は平成22年以降入館料、物販収入

ともに伸び悩んでいる傾向である。展示事業費も収入の減少と連動して縮小傾向にあり、特別展の内容も縮小せざるを得ない状況になっている。酒田市も財政状況が非常に厳しくなっており、指定管理料を増額することは難しく、両財団と市と事務レベルで協議を重ねた結果財団経営を改善するための打開策として両財団を統合して新財団設立の検討に入ったことが経緯となる。

新財団に期待することについては、組織体制を強化することによって市内外の美術館統合のネットワークを構築できるのではないかと。美術館は市内外とのネットワークは築いているが、土門拳記念館はネットワークを築いていないということなので組織体制を強化して他県の写真展示館とネットワークの構築ができればと思っている。それから、業務の一本化、事務ノウハウの共有化による効率的な業務執行、計画的な人材育成である。今酒田市美術館には正職員として学芸員が2名いるが、土門拳記念館には非常勤の学芸員が1名いるだけで、ここに正職員として写真専門の経験をしてきた学芸員を雇用し育成していきたいと考えている。人員の体制を強化することによって国の補助金の活用による財源の確保もしていきたいと思う。それから先ほどから話に出ているが、教育プログラム、ワークショップの充実、質の高い展覧会の開催など、両施設の機能の強化が図れるのではないかと。と思っている。

新財団の目指す方向性について、現在の両財団の定款では個々の施設が地域で果たす役割が述べられているが、統合財団の新定款ではより大きな視点に立って本市の文化政策推進の基盤となる条例、計画の考え方にに基づき、まちづくり及び目指すべき地域社会の在り方を定款で目的にあげている。新財団の設立後も基本的には指定管理型の財団と言われる土門拳記念館と酒田市美術館の指定管理業務を専従で行う財団法人であるが、将来的には他の文化施設、希望ホールや出羽遊心館等の指定管理業務を行うなど体制整備を徐々に進めるとともに、財団の利点を活かして市の直営では難しい長期的視野に立った文化芸術に携わる人材の育成を図るなど、本市における文化芸術施策の推進の一役を担える体制となるような財団を目指していければと考えている。

会 長:これについては、前の審議会で委員から財団の方々に向けて助言をしていただいたという経過があると聞いている。この件について委員からコメントいただきたい。

委 員:危機感を持っているような態度を明確に示していただいた。具体策を持っていたかどうか、事務局で記録はあるか。

事務局:本日、申し訳ないが記録を準備していない。危機意識は少し足りない部分があり、そこが一番の課題だと捉えている。そういうこともあったので、委員から他県の事例も交えながらお話をいただいたと記憶している。

委 員:今、財団統合について聞いても、話が早晩的な感じがしてしまい、そんなにできないでしょ？という印象を持ってしまう。現在、色々な館で導入されている対応型鑑賞プログラムなどを急いで検討してみるとか、特別展をやったときに見に来てくれる市民を気長に育てるような発想を持ってもらいたいと感じた。

委 員:私も本間美術館に勤務しているので、財団の運営の厳しさ、入館者数の減少にいかに対応しなければいけないかということは長年の悩みだ。特に地方都市に関しては人口減少に伴い若い世代が帰ってこないが、実際学校との連携も難しい中であって、そういう世代を育てることができなかったということが根本にあるのだと思う。もっと若い世代に美術館、博物館施設に親しんでもらう、それと酒田市にはたくさんの文化施設があるので、市民の皆さんには自分の目で見て体験して楽しんでもらう施策が必要である。今のコロナ禍にも関連するが、自分の地元を見つめ直すいい機会ではないかと思う。

委 員:財団統合の方向性については、自分の中では「楽しそう」と思った。市内外の美術館等とネットワークを構築する、ワークショップの充実等、期待することを読んだときに、例えば美術館を巡るといふ人の回流を作るという事業がしやすくなるのではと思う。美術館とか土門拳記念館が宮野浦地区から本間美術館ま

でのあの一本の道路に何か作るということも出来そうだ。先ほどの今年度の目標と照らし合わせながらつながって色々なものを生み出すというところを工夫していく、いい起爆剤になると感じている。

委員:私は両財団の理事を数年間継続してやっており、この大きな問題は早くから認知していた。お金がなければどうしようもないと、やむを得ず統合の方向性が決まった。今後は、個性的で素晴らしい土門拳記念館を見に行こうとなるくらいの工夫をしていかないといけないと思う。パッションが見えるような人材を早く育てていく必要があるのではないだろうか。

委員:教育プログラムやワークショップの充実にとっても期待したい。行って楽しいというところにはまた行こうということにつながっていくのと思う。私たちの美術館、写真館となっていくためには、学芸員の方の頑張りも必要だし、それをバックアップしていける体制が大事になってくると思う。ちなみに私が小さいころ本間美術館の庭で三輪車大会をやって沢山遊んだ覚えがあり、そのため本間美術館はすごく身近な存在に感じ心に残っている。今の酒田の子供たちにとっても、いい環境を心に残る存在として定着していけばいいと期待している。

委員:今までの話と資料の説明からすると、経営が悪化している土門拳記念館が、酒田市美術館に吸収合併されるというイメージを持つ。委員がおっしゃったように、もし危機感があるのであれば、土門拳記念館側にはかなりの大きな危機感がないとまずいと思う。もしそれがなくて理事の数が5対5になっているのであれば、同じ財団に2つの理事会があるのと一緒である。俗に言われるM&Aには、統合効果、シナジー効果と言われるものが必ず必要になってくるので、ただ2つを1つにしたという結果だけが残らないようにしておかないとならない。逆に言うそうなるのではないかと思っているということだ。非常に危険な組織の統合計画だなと思っている。例えば土門拳の皆さんが、何とか土門拳の思想を残してほしいという思いを残して理事を辞めるぐらいの覚悟をしないとならない。基本財産を食いつぶしていこうとしているくらい大変な状況になっているのだと思うので、そこはかなり本気になって考えなければならぬ。

委員:ずいぶん昔、高岡市の美術館に行ったときに、「こんなところでビールでも飲みたいもんだ」と言ったら、「ここはビアガーデンをやるんです」と言っていた。そういうことを酒田でやれと言っているわけではないが、例えばそういう発想もあってはいいのではないかと。なぜそう思ったかという、指定管理の場合、物販もあるが自主財源、収入が増えていけば委託料や補助金が減る。それでは全体の収益が全く変わらないしやりがいに結びつかない。そういう点ではある一定の自己努力による収益が一定水準であればインセンティブをつけてその分を活動費なり人材育成に回すといいと思う。指定管理の趣旨かどうなのかわからないがそういう風な発想をぜひ考えてもらいたいと思う。

会長:委員から意見が出たが、合併する場合、双方の役員体制の兼ね合いをどうするか構想はあるのか。

事務局:新しい理事、評議員については依頼を始めている最中で大幅に変わる予定だ。新財団の理事を本審議会の中から一人選出してもらいたい。この場を借りて、上松由美子委員を推薦させていただきたいと思う。芸文協の会長として工藤委員にもお願いしている。評議員と理事会の役割を少し分担しようということで、理事会は経営的な素地を持った方に、評議員は地元の意見を吸い上げてくれる方。今まで工藤委員からは理事をしていただいていたが評議員に移っていただく。阿部委員からも社会福祉協議会の会長として理事の方に入っていただくことになっている。

会長:今回の統合の場合、写真美術館の方が専門性が高いので将来性の戦略の作り方が難しく、選択の幅も小さい。片一方は市の美術館で、こちらは総合性が高い。そういう意味では全体を美術館に抱いてもらう方が身の自由はきくと思う。名前をどうするかが非常に重要な課題であるが、財団の統合ということはやむを得ないと思う。奈良市の入江泰吉記念奈良市写真美術館を訪ねたときに、北海道の美瑛町の写真美術館と連携しますという話が出た。なぜ酒田市の写真展示館と連携しないのかと質問したが、回答が

無かった。日本で有名な写真美術館はこの3つくらいで、一番古いのは入江記念館、美瑛町が一番新しい。この3つが連携するだけですごいことができるはずで、ネットワークを繋げればできると思う。将来的にお願いしたいのは、新財団の職員をこういう審議会が開かれた時に事務局の一員としてでいいので会議に入れていただくこと。何が議論されているか学んでいただきたい。特に事務局長という立場の人は絶対で、事業課長という人にもいてほしい。それから職員研修で文化政策の研修があれば、必ず財団の職員も一緒に聞いてもらいたい。また、公文協の研修や博物館学会の研修、マーケティングの研修には絶対に行ってほしい。先ほどクリエイティブディレクターを雇うと言っていたが、その人がいなければどうにもなりませんという風になったら困る。市の職員に早く技術を移植してもらって、自ら動けるようにしてほしい。それに加えて、アートマネジメント研修は必修である。地域創造でやっている短期研修や、市町村アカデミーでやっているものを受けたいと思う。それから最後に、美術館でビアガーデンは可能である。先ほど頑張れば頑張るほど補助金が減らされるとの意見があったが、これはやり方を変えればいいわけで、利用料金制を導入すればいい。基本的な指定管理料をここまでと設定して、ここからは企画展などを独自に企画して儲かった分は全部指定管理者の歳入とする方法がある。博物館で若者が爆発的に集まりだした、という町はむしろ小さい町に多い。私がいつも不思議に思うのは、みんなが憧れる土門拳先生の写真美術館があるのになぜこんなに人が少ないのか。地の利が悪いからと言うが関係ない。シンボルの逆転現象を早く起こしてほしい。博物館でまさに若者が爆発的に集まりだしたという事例はいくつもあるので、そういうものを研究して学んでいただけたらと思う。

委員：土門拳文化賞の選考委員の方と意見交換した際、もっと開かれた選考をしたら良いと申し上げた。拳賞が1名、佳作が3名、計4名表彰されるが、最後の選定はオープンな場で4名によるオーラルプレゼンテーション等をし、選考委員やエントリーした写真家、写真愛好家、酒田市民等みんなで議論、評価し決めるというようなイベントとし、酒田市民賞など設けたらもっと活性化するのではないかと。開かれた選考会、表彰式も選考委員による講評などをみんなで行えば、写真に興味がある方が大勢集まってくる。なぜこの写真が一位に選ばれるのかがわかるし、写真芸術の深さや多様性に触れ、写真芸術を理解する一助になるのではないかと。

会長：今日の議論することは終わったが、事務局から付け足すことなどあるか。

事務局：事務局からは特に無い。

会長：本日の協議を終わり、事務局にお返りする。

教育長：先ほど話題が出たが、企画運営部会・作業部会などの人が、興味があればこの会議を見られるという状態にしておくことがとても大切だと思う。それから財団の統合を検討するような組織、あるいは市庁部局にこのような考え方があるということを伝えることが大事なことだと思う。行く先が間違った方向に行かないように、財団の方にこの意見をどう届けたらいいか考えたい。私は今日この審議会に参加させていただいて、今こそ何をすべきなのか考えさせていただいたと感謝している。このコロナ禍で文化芸術的にはみんな弱い立場になっており、それは障がいがあるという意味での弱い立場ではなく、普通の人でも文化的に弱い立場となっている。そうすると、通常のやり方ではやっていけない。つまり社会包摂を考えると、市民みんなを考えるということになる。今日は貴重なご意見を数多く頂戴し、心からお礼を申し上げます。

6.閉会

【以上】